

デート修行 (1)

AV嬢

春日信彦

呪縛（じゅばく）

コロнда君はお菊さんの気配を感じると頭痛が起きるようになっていた。お菊さんはコロнда君の顔を見るたびにお見合いの話を持ち出すのだった。コロнда君は2年前からお見合いを強制され、すでに10回もお見合いをさせられていた。お菊さんは、一刻も早く結婚させようと美人で由緒あるご令嬢を探し出しては、お見合いをさせていた。お見合いの相手は申し分ない京美人で家柄もよかったが、コロнда君は、極力相手を傷つけないようにすべて断った。

笙子との結婚を決めていたコロнда君は、一応はお見合いしても最終的に何らかの理由をつけて結婚を断っていた。お菊さんは、コロнда君の気持ちを十二分に分かってはいたが、笙子との結婚は天下を取らせるにはふさわしくないとはいえず反対していた。コロнда君は、自分の気持ちを何度もお菊さんに訴えたが、お菊さんは聞く耳を持たなかった。と言うのも、心筋梗塞で倒れて入院した父親の体調が思わしくなく、一刻も早くコロнда君を大臣にさせたかった。

そのためには、政略結婚が不可欠と考えていた。万が一、政界にまったく力のない笙子と結婚してしまえば、総理どころか大臣にもなれないと思ひ、お菊さんは笙子との結婚の邪魔をしていた。お菊さんの頑固さに辟易していたコロнда君は、もし、これ以上笙子との結婚の邪魔をするならば、家出しようと思うようになっていた。最近では、毎日のようにコロнда君の書斎に現れては、天下を取るための心構えを繰り返して話すのだった。

壁時計の短針が、8時をさし、長針が12時を回った。時計に合わせたようにお菊さんの足音が近づいてきた。そして、足音が止まるとコンコンとノックの音が響いた。コロнда君は、大きなため息をつきガクッとうなだれて「はい、どうぞ」と返事した。静かにドアが開かれると作り笑顔のお菊さんが現れた。テーブルに腰掛けると早速、三枚もお見合い写真を並べた。最近では、お菊さんの顔を見ると首を絞めたくなる衝動にかられ、自分の心が怖くなっていた。

お菊さんは吊り上げた目を一瞬丸くしてやわらかい口調で話しかけた。「坊ちゃん、最近元気が無いじゃない。もっとはつらつとした笑顔を作らないとモテないわよ。今度のは、今までで一番のお相手よ。きっと、気に入るから。焦ることはないわ。この人だと思ふ人に当たるまで何回でもアタックすればいいのよ。振られたからって、落ち込んでいたら、ますます振られ癖がついちゃうから。さあ、ニコッと笑って」

意味のない言葉を何回も聞かされたコロンダ君は、あたかも聞いているふりをして頭は眠っていた。「お菊さんの親切は心から感謝しています。でも、何度も言ってるように、すでに決めた人がいるんです。お菊さんに申し訳ありません。もうこの辺で勘弁してください」お菊さんは、苦虫をつぶした表情で話し始めた。「坊ちゃん、まだ、あんな博多のイモに未練があるのですか。女を切り捨てるのも、男の甲斐性です。さっさと、手を切りなさい」

このような非道な話がこの一年続いていた。お菊さんは、笙子は政治家の妻としてふさわしくないと言い張り、彼女との結婚に断固反対し続けていた。また、コロンダ君に天下を取らせるために天皇家とつながりのある大物政治家もしくは財閥のご令嬢と結婚させようと躍起になっていた。「お菊さん、僕は、天下なんて取りたくありません。天下を取って、いったいどうなるというのですか。マフィアの子分になって、大きな顔をして、何の自慢にもなりません。お菊さん、もっと現実を見つめてください。今、日本は貧困植民地になりつつあるんです。むしろ、日本に必要なのは労働者革命なんです」

いつものようにお菊さんは目をつり上げ豹変した。コロンダ君を睨み付けると手を震わせ話し始めた。「坊ちゃん、自分が言っていることが分かっているのですか。坊ちゃんは、アメリカのイヌでいいのです。日本は、アメリカのイヌになったからこそ、今の豊かな国になれたのです。アメリカの軍事力は低下し続けているでしょ。今こそ、アメリカ軍を支援するために、大日本帝国は軍事力強化を図るときなのです。坊ちゃんこそ、現実を直視してください」

あきれ返った表情のコロンダ君は、これ以上議論してもいつものような平行線をたどるとうんざりしたが、この際家出する覚悟でとことん議論することにした。「お菊さんには、長い間お世話になりました。今まで、お菊さんの言う通り、やってきたと思います。でも、結婚に関しては、お菊さんに従うわけにはいきません。僕には僕の人生があるんです。もうこれ以上、お見合いは致しません。お菊さんに迷惑をかけるだけです。分かってください、お菊さん」

肩を落としたお菊さんは、気落ちした声で話し始めた。「坊ちゃんは、博多のイモと言う魔物に取りつかれてしまったんですね。もうおしまいです。坊ちゃんは、総理大臣になれる家系に生まれたにもかかわらず、この幸運を自ら捨てるなんて。お父様がお聞きになったら、絶望して、ショック死なされるかもしれません。もう一度、じっくりと将来のことを考えてみてください。人生は、一度きりです。七転び八起きと言う格言がありますが、一度つまずくと二度と立ち上がれなくなることであるのです。特に、政界においては、人脈なくして天下は取れません。本当に、天下を取りたくないのですか？」

父親の期待に応えられないことに恐縮したが、コロンダ君はマジに返事した。「はい、父親の期待に応えられないのは、とても申し訳なく思っています。でも、僕は、政界には向いていないと思っています。今限りで、議員をやめる覚悟です。お菊さんにも大変ご迷惑をかけしたことを何とってお詫びしていいか分かりません。どうか、分かってください」お菊さんは、肩を落として黙って聞き入っていた。

このままではコロンダ君に押し切られてしまうと直感したお菊さんは、戦法を変えることにした。「そうですか。とっても残念です。お母さんにはなれなくとも、長い間、精一杯、坊ちゃんのためにお世話をしてみました。でも、残酷じゃありませんか。本当に、神様はいるのでしょうか。坊ちゃんが、政界から去ると決意なされたことは、お菊の育て方が誤っていたということですね。もはや、お菊は用なしのパバアでしかありません。これ以上、生き恥をさらしたくはありません。死んでお詫び申し上げます。坊ちゃん、不甲斐ないお菊をお許してください」

死んで、と聞いたコロンダ君は目を丸くして跳び上がってしまった。意表を突かれたコロンダ君は、なんと返事していいか分からず、金魚のように口をパクパクさせてしまった。自分に落ち着け、落ち着け、と言いつつ聞かせようか言葉を絞り出した。「ちょ、ちょ、ちょっと、そう、悲観しないでください。お菊さんが悪いなんて、一言も言っていません。お菊さんには、感謝しています。お菊さんを見捨てたりなんかしませんよ。これからも、ずっと、僕のお母さんでいてください。結婚しても、一緒に暮らしたいと思っています」

作戦成功とほくそ笑んだお菊さんはさらに追い打ちをかけた。「でも、坊ちゃんが国会議員をやめてしまえばお菊は用なしじゃない。さらに、あの忌々しいイモと結婚してしまえば、粗大ごみ扱いされて捨てられるのは目に見えてるわよ。もう、お菊には生きていく場所はないのよ。孤独死するしかないのね。そう、旅に出ようかしら。冬の日本海はきっと冷たいわよね。断崖絶壁に立って神にお祈りするわ。すべては、お菊が悪うございました。どうか、お菊の罪をお許してくださいと」

コロンダ君は、とんでもないことになってしまったと手が震えだしてしまった。突然、立ちあがったコロンダ君は、素早くお菊さんの右横に立つと泣きそうな顔で慰めた。「お菊さん、考え過ぎですよ。結婚しても一緒に住みますから、そんなに嘆かないでください。笙子は、お菊さんを毛嫌いするような女じゃありません。きっと、三人でうまくやっていますよ。涙を拭いて、元気を出してください」

コロнда君はハンカチをお菊さんに手渡し、席に戻った。お菊さんは、うそ泣きの涙にハンカチを当て一層悲しい表情を作った。そして、涙声で話し始めた。「でも、坊ちゃんは女の恐ろしさを知らないのよ。いったん結婚してしまえば、あのイモは夜叉になるに決まってるわ。毎日、いびられて追い出されるに決まってるわよ。すべては、お菊が悪いんです。潔く自害します。同情なんて、いりません」

これ以上どうやって慰めればいいのかわからなくなってしまった。ここはひとまずお菊さんの気持ちを汲んで、自害だけは防ぐことにした。「お菊さん、僕もちよっと、浅はかだったように思います。確かに政治家には向いてないと思いますが、やるだけのことをやってもいけないのに逃げ出すようなことを言ったことは、恥ずかしいことでした。天下は取れなくとも、国政をよくするための努力はすべきだと思います。どうにかして、貧困問題を解決すべく努力していきます。今後も、お菊さんのご支援、よろしくお願いします」

どうにか手のひらに載せることができたと思ったお菊さんは、小さくうなずきハンカチを握りしめ返事した。「坊ちゃんにお願いされれば、お菊は命を投げ出してもお仕えいたします。そのためには、まず、結婚が第一です。一刻も早く、ご結婚をなされ、御父上に孫をお見せください。京女は最高ですよ。一刻も早く、博多のイモなんか切り捨てて、京女を賞味なさってください。きっと、お気に召しますから」お菊さんは、頑として博多のイモだけは、許す気になれなかった。

お菊さんの筈子嫌いには、手に負えなかった。筈子がいどこであることを考えれば、確かに結婚相手として、ふさわしとは言えない。でも、法律で禁じられているわけではない。現に、江戸時代までは、いどこ同士で何の問題もなく結婚をしていた。特に、皇族、貴族では、いどこ同士の結婚が尊ばれていた。血が濃くなることは、奇形児の発生率が高くなるとは聞いているが、それはあくまでも確率であって、必ず奇形児が生まれるわけではない。筈子との結婚は、根気よく説得する以外にないと思えた。

ニコツと笑顔を作ったコロнда君は、結婚の話避け、社会情勢の話をすることにした。「日本は、急激に貧困化しています。政治家が取り組まなければならないことはたくさんありますが、その中でも、若者の低賃金労働対策と親による子供の虐待対策ではないでしょうか。不当労働問題対策として、第一に、労働組合の強化だと思っています。現在、大企業は派遣社員中心の労働で成り立っています。そのため、労働者は団結できず、労働者の権利が主張できなくなっています。このままだと、労働者は、奴隷と化してしまいます。今後、最優先で派遣社員制度の改革をやって行こうと思っています」

お菊さんは、政治のことはどうでもよかったが、何度もうなずいて、コロンダ君の機嫌を取った。「坊ちゃん
のやる気をお聞きして、お菊は安心しました。坊ちゃんなら、きっと総理になれます。日本のため、世界のた
めに頑張ってくださいませ。お菊は、どこまでもお供致します。でも、大物になるには、女心をつかまな
ければなりません。女心を熟知するには、いい女の味を知らなければなりません。イモ女の味しか知らない
ようでは、女を知っているとは言えません。とにかく、セックスは多いほどいいのですよ、坊ちゃん」

お菊さんの魂胆が見え見えで、コロンダ君の表情はしかめっ面になった。女遊びをさせて笙子と別れさせつ
もりだということは、百も承知していた。「お菊さん、僕は女遊びをしたいとは思いません。愛する人と結
婚できれば、それでいいのです。僕は、政治家として、正義を貫きたいのです。日本人を奴隷化するよ
うな派遣システムには断固反対なのです。マフィア政治と断固闘っていきます。たとえ、暗殺されよう
とも、ケネディーのごとく正義を貫いて死にたいのです。日本民族を守り通して死にたいのです」

父親の女好き遺伝子を受け継いでいるはずと思っていたが、女遊びをこうもきっぱり拒否されては、次
の手が思いつかなかった。「坊ちゃんの正義は、見上げたものです。でも、この世の中、女が半分い
るのです。女を使いこなせなくては、政治はできません。坊ちゃんは、愛する女とおっしゃいま
したが、まだまだ、女性経験が足りません。もっと、女性遍歴を重ねたうえで女を品定めされる
べきです。そうすれば、愛する女も、いい女もわかってくるのです。イモは所詮イモな
のです。もっとおいしい果物を召し上がってください。お菊のようなおいしい果物に出くわす
まで、お遊びください」

コロンダ君は、ここまで自画自賛するとは思わなかった。しつこくて屁理屈をこねるお菊さん
のような女性がいい女とでも言いたいのだろうか。どんなに美人でも、お菊さんのように自意識過剰
でしつこいのであれば、美人は御免こうむりたい気持ちになった。「お菊さん、女性
は美人で家柄がいいのに越したことはないと思います。でも、人の価値は、顔や家柄で決まる
ものでしょうか？僕は思うのです。その人のやっていることに価値があると」

コロンダ君は、笙子の活動をお菊さんに教えることにした。コロンダ君は、彼女の福祉活動から
心の優しさを感じていた。「お菊さん、笙子を嫌っているようですが、彼女にもいいところがある
んです。今、老人ホームや児童養護施設を回って、彼らを歌で元気づけているんです。そのよ
うな行動に、彼女の素晴らしさを感じるのです。マスクはイモかもしれません。でも、いい
じゃないですか。おじいちゃん、おばあちゃん、子供たちに、とって人気があるんです
よ。こういう女性も評価されていいんじゃないでしょうか？」

笙子を援護するコロンダ君のにやけた顔を見た途端、お菊さんはイラっと来た。お菊さんにとっては、老人や子供たちに喜ばれる福祉活動をやっていたからと言っても、笙子にはつき敵でしかなかった。イライラが募りほほをピクピクさせたお菊さんは、笙子が憎いあまり福祉活動までけなし始めた。「慰問活動ね～。まあ、悪いことではないけど、自慢することでもないわよね。福祉活動するのがいい女の条件になるなんて、聞いたこともなわ。やっぱ、いい女の条件は、マスクと家柄じゃないかしら。まあ、厚化粧とコスプレしかできないイモ女よりは、福祉活動をやっている方がいい女だとは思うけど」

徹底して笙子をけなすお菊さんにお手上げだったが、いつかきっとわかってもらえる日が来ると信じたかった。どんなに反対されてもけなされても、お菊さんが分かってくれるまで根気よく笙子の良さを訴えることにした。「そうでしょ。イモでも心が優しければいいじゃないですか。蓼（たで）食う虫も好き好きっていうじゃないですか」お菊さんは、どうしてあんな博多のイモを好きになったのか不思議でならなかった。あの忌々しいイモを忘れさせるには、女遊びをさせるのが一番とますます思えてきた。

お菊さんは、男を骨抜きにできるほどの色気のあるいい女はいないかしばらく考え込んでいた。極上の女の味を味わってしまえば、イモがいかにもずいか気づくに違いないと思えた。コロンダ君は、黙りこくってしまったお菊さんに声をかけた。「お菊さん、何、考え込んでいるんですか。ご令嬢には、悪いことをしていると思いますが、今回のお見合いまでは、やってみます。でも、今回までですからね。悪く思わないでください。これ以上、先方にご迷惑をかけるわけにはいきません」

現段階では、ゴリ押しはなんの成果も生まないと悟ったお菊さんは、一度うなずき返事した。「坊ちゃんの気持ちは、よ～～く分かりました。今回のお見合いはなかったことにします。だからと言って、あのイモとの結婚を許したわけではありませんよ。それと、今後は女の勉強に励んでいただきます。坊ちゃんには、いろんなことを教えてきましたが、抜けていた勉強がありました。それは、女体学です。女と言うものは、性感で考えるものです。これからは、嫌と言うほどセックスをしていただきます。覚悟はいいですね」

コロンダ君は、お菊さんの意味不明の弁舌にあきれ返ったが、この場は丸く収めた方が賢明と思い、ニコッと笑顔を作り、ハイと返事した。「お菊さんのおっしゃることは、ごもつともです。確かに僕は、女性のことはよくわかりません。実のところ、笙子のこともよくわからないのです。笙子は何を考えているのかさっぱりわかりません。でも、好きなのです。はっきり言って、僕は恋愛が苦手なんです。学生時代に恋愛らしきものをしたように思うのですが、結局、振られてしまいました。女性に関しては、お手上げなんです」

お菊さんは、しばらく深刻な顔つきで話に聞き入っていたが、突然ニコツと笑顔を作った。「坊ちゃん、次回のお見合いは、やってもらいます。最終的に、嫌なら断っても構いませんが、でも、3ヶ月間はデートしてもらいます。女の勉強にはデートは不可欠です。真剣にデートをやってみるのです。いいですね」お菊さんには、名案が浮かんでいた。コロダ君も気持ちのこもったデートもせずに一方的に断るのは、相手に失礼だと思っていた。「分かりました。デート期間中は、笙子のことをきっぱりと忘れて、真剣に相手のことを思ってみます」

お菊さんは、笑顔を作るとコロダ君の肩をポンと叩き、部屋を出て行った。お菊さんは、自分の部屋に戻ると名刺ファイルをめくり、AV近藤監督の名刺を探した。近藤ヒカルの名刺に目が留まるとファイルから引き出した。彼との面識は、つい先月のことだった。8月に出版したエロ小説“尼の淫靡な生活”を読んだ近藤監督は、ぜひ、”尼の淫靡な生活“をわが社で映画化させてほしい、とお菊さんの家までやってきたのだった。

AV嬢

早速、近藤監督と12月5日（火）午後3時に面会の約束を取ったお菊さんは、当日午前10時のANA航空券を取った。コロダ君には法事があるので京都の実家に三日ほど泊まると言ってお掛けた。コロダ君は、頭痛の種のお菊さんがいなくなっただけで気分が爽快になり、しばらく帰ってこなければいいと思った。西中洲日活ビル7階にある近藤監督の事務所に3時10分前に到着すると監督との面会を受付に申し出た。応接室に案内されたお菊さんは、ベージュのソファに腰掛け5分ほど待つと近藤監督が笑顔でドアを開いた。

お菊さんの正面に腰かけた近藤監督は、笑顔で挨拶した。「遠路はるばるよくぞいらっしやいました。たまには、田舎に旅をされるのもいい息抜きになってよろしいでしょう。早速ですが、御用件と言うのは、例の作品の確認でしょうか？そのことであれば、御心配はありません。試写会を行い谷崎様に最終チェックをお願いしようと思っていたところなのです。費用の面もありますので少しご不満な点もあるかと思いますが、その点をご勘弁ください。AV業界は不景気でして、資金不足なのです」

お菊さんは、AVビデオのことはよくわからないためうなずいては軽く相槌を打っていた。「AVビデオの制作は大変なのでしょうね。私は物書きで、ビデオ製作についてはよくわかりません。ところで、今日お伺いしたのは、ビデオ制作のことではありません。ちょっとしたお願いが。それが、ビデオとは全く関係ないお願いで。まあ、笑われるかもしれませんが、お聞きくださいますか」

お願いと聞いて近藤監督は、首をかしげて返事した。「私のようなものでよければ、何なりとおっしゃってください」お菊さんは、もじもじしながらどのようにお願いしようかと考えていた。「なんと言いたいでしょうか、うちの坊ちゃんのことなのですが、その坊ちゃんは誠にうぶと言うか女性にもてません。デートもまともにできないのでございます。お見合いを何度させても、振られてばかりで、本人も自暴自棄になっているようで、何とか坊ちゃんを一人前の男にしてあげたいと思ひまして、そこで、お力をお借りしたいわけです」

近藤監督は、何が何だかさっぱり意味がつかめなかった。「デートが苦手ということはわかりましたが、私もモテる方の男ではないので、私に相談されましてもネ～～」お菊さんは少し顔を赤らめて、話を続けた。「まあ、坊ちゃんは、箱入り息子で、デートの経験が少ないといひますか、女性の口説き方を知らないといひますか、女性の誘い方を知らないといひますか、女遊びもできないといひますか、まあ、はつきりいひますと、自分から強引にセックスができないのでございます。そこで、たくましい男にするためにお力をお借りしたいのです」

近藤監督はのけぞって目を丸くした。彼もAV監督をやっていたが、デートが苦手で、うまく女性をその気にさせるのは苦手だった。「いや～～、それは、ますます困りましたな～～。僕も、意外とおくてなんでして、いまだ独身なのです。監督業と女性を口説くのはちょっと違ひまして、私の方が教えてほしいぐらいです。ご期待に応えられなくて申し訳ありません」近藤監督は、頭を下げて申し訳なさそうに頭をガリガリかいた。

お菊さんは、大きな勘違ひをさせてしまったことに恐縮してしまつた。「近藤監督、頭をおあげください。お菊のお願いといひるのは、監督にご指導いただきたいといひるものではありません。ちょっと、女優の方とお見合いさせていたきたいのです。いかがでしょう」監督は、お見合いと聞いてますますわけがわからなくなつた。「お見合いですか？いったい誰とです？まさか、AV女優ってわけはないですよ」

お菊さんは、目が飛び出さんばかりに目を見開くと返事した。「その、まさかです。どなたか、坊ちゃんとお見合いしていただきたいのです。そして、女の甘い味を教えていただき、セックス大好き男に変身させていただきたいのです。どなたか、ご紹介いただけませんか？タダとは申しません。あくまでも、デートの演技ですから、出演料はお支払いいたします。いかがなものでしょう」

デートの演技と聞いて面食らったが、AV業界の不景気はますます激しくなっていた。エロアニメの普及が主な原因ではないかと監督は思っていたが、原因はともかく不景気の加速で多くのAV制作会社は倒産寸前に追い込まれていた。かつては高収入が期待されるAV業界に美少女たちは飛び込んできたが、このごろは、たとえ収入が少なくとも、アイドルグループにこぞって飛び込むようになってしまった。一時期人気があったAV嬢も仕事が激減し、クラブ、キャバクラ、ソープなどの副業で生計を立てていた。

近藤監督は、仕事がなく嘆いているAV嬢を見るとどんな役でもいいから仕事を与えてやりたいと思っていた。目を閉じた近藤監督は、腕組みをしてしばらく考え込んだ。AV嬢の仕事にしては、デートの仕事は荷が重いように思えた。だが、失業寸前の彼女たちに仕事の選択などと言うぜいたくは許されないように思えた。パッと目を見開いた近藤監督は両ひざをポンと叩き返事した。「AV嬢にデートの依頼は初めて、成功の自信はありませんが、AV嬢と言えども女優の端くれです。やって、やれないことはないでしょう。要は、坊ちゃんをセックス大好きエロ男に変身させればいいのですね」

ニコと笑顔を作ったお菊さんは、身を乗り出して返事した。「はい。ライオンのようなたくましいセックス大好きエロ男に変身させていただきたいのです。やっていただけますか。あくまでも、嘘のデートですから、セックス指南をいただいて、3か月後にはきっぱりと別れていただければ結構です。ところで、依頼料は、おいくらほどお支払いすればよろしいでしょうか？」

目を輝かせもう一度腕組みをした近藤監督は、頭の中に近藤プロダクション所属のAV嬢を思い浮かべ適任者はいないか、じっと考えてみた。うぶで生真面目な坊ちゃんをうまく誘惑できて、おしゃべりも得意で、若干品があって、知性的で、こんなAV嬢は、果たして・・・、そうだ、新人のあの子であれば、素のままでもうまくやれるかも？大きくうなずいた近藤監督は、自信たっぷりに返事した。

「このようなデートの仕事は初めてです。しかも、外務大臣の御子息であられるお坊ちゃまのお見合い相手の仕事ですから、着物が似合うような上品さがあって、美人で、教養もあって、おしゃべりも上手で、これらの条件を兼ね備えたかなりハイレベルの女優を手配しなければなりません。さらに、男を惑わすほどの色気があって、25歳前後の女優となれば、ちょっと高くつきますが、よろしいですか？」お菊さんは、一瞬顔が引きつった。やはり、プロに頼めば高くついたと思ったが、ここまで来たら後には引けなくなった。

清水の舞台から飛び降りる気持ちでゆっくりうなずいた。「はい、おいくらでしょう」笑顔を作った監督は返事した。前金で、50万。仕事終了後50万です。それと、福岡以外でデートする場合、女優の交通費と宿泊費は別途負担していただきます。これでよろしければ手配します」100万と交通費、宿泊費。確かに高いと思ったが、いまさら福岡までやってきてみじめな気持ちで帰りたくなかった。このデートで博多のイモを忘れさせることができるのであれば、安いものだと思った。口を真一文字にしたお菊さんは、握り拳を作って返事した。「分かりました。お願いします。50万は、東京に戻り次第、即刻振り込みます」

契約成立に笑顔を作った近藤監督は、適任者と思われる季実子を早速会わせることにした。「それではお見合い相手と呼んでまいります。お時間は、まだよろしいですか？」お菊さんもお見合い相手が気になっていた。監督が選任したAV嬢だから不平は言えないと思ったが、やはりマスクが気になった。履歴書には、坊ちゃんが気にいるような履歴を書けば問題ないと考えていたが、あまりにも下品そうなマスクであればチェンジをお願いしようと思っていた。

お菊さんは、身を乗り出し返事した。「はい、ぜひ、お見合いをしてくださるAV嬢にお会いしたいと思います。坊ちゃんは、面食いな方ではないのですが、上品で教養がある女性がお好みなんです。よろしくお願いします」監督は、きっと気にいっていただけると内心思っていたが、季実子がこの仕事を引き受けてくれるかどうか不安になった。万が一断るようなことがあれば、この仕事はふいになってしまう。教養があつて上品なAV嬢は季実子以外にいなかったからだ。

「10分ほど待ついただけますか。彼女に仕事の内容をある程度話してまいりますので。谷崎さんも何か要望があれば彼女にしっかり伝えてください」お菊さんは、部屋に残されると現れるAV嬢のことが気になってきた。AV嬢がうまく坊ちゃんを誘惑できるか疑問に思い始めた。坊ちゃんは自分からホテルには誘うことはしないから、坊ちゃんを興奮させ自然にベッドに誘惑できなければ、このセックスデートは失敗に終わってしまう。お菊さんは、自分がお見合いするかのように胸がドキドキしてきた。

監督が部屋を出て15分ほどたつとコンコンとノックの音がした。即座にドアが押し開けられると遠慮がちにAV嬢が顔をのぞかせた。「失礼します」一瞬ご令嬢かと思うほどの上品なマスクが目飛び込んできた。お菊さんは、即座に立ち上がって挨拶をした。「仕事を依頼しました谷崎と申します。よろしくお願いします」季実子はお菊さんの正面に腰掛けると早速話しかけた。「今回のお仕事は初めての経験になりますが、それでもよろしいでしょうか？全力は尽くしますが、お相手は素人さんですから、ちょっと自信はございません」

お菊さんは目の前のAV嬢をまじまじと見つめた。しばらく見つめた後尋ねた。「あなたは本当にAV嬢ですか？品のある顔立ちで清楚な風貌をしていらっしゃる。資産家のご令嬢と言ってお見合いされても全く疑われることはないんじゃないかしら。ご令嬢のようなAV嬢の方もいらっしゃるのね。あなたなら、申し分ないわ。きっと、坊ちゃんは気に入るわ」お菊さんは感心した顔で改めてまじまじと見つめた。

顔を真っ赤にした季実子は、仕事の話をすることにした。「国会議員でいらっしゃるお坊ちゃまとお見合いをして、3か月間デートをする仕事だと聞きましたが、そのほかになにかやってほしい御要望はありますか」お菊さんは、坊ちゃんの性格を知らせておくことにした。「確かに、3か月間デートしていただければいいのですが、坊ちゃんは、とっってもおくてで、恋愛経験もあまりないのです。だから、自分から女性をホテルに絶対誘いません。だから、あなたが、うまくベッドに誘惑して甘いセックスを味わわせてやってください。早い話、坊ちゃんをセックス大好きライオンにしてほしいのです。

季実子は、眉間に皺をよせ困り果てた表情を作った。ベッドに誘惑してほしいと言われますます自信を無くしてしまった。「私にできるでしょうか？AV女優は男優のリードで演技します。色摩の役もありますが、あれは男性を喜ばず演技であって、素人相手では、あまりにも不自然です。生真面目でうぶな坊ちゃんを自然に誘惑できるか自信がありません。実を言いますと、私も恋愛経験があまりないのです。ちょっと、私には荷が重いようです。ほかの方を探されてはいかがでしょう」

断られたお菊さんは、一瞬固まってしまった。女が誘惑してセックスさせることは簡単なことのように思っていたが、例外はあるわけだし、その例外に坊ちゃんが当てはまるように思えた。品位があつてご令嬢に見えるAV嬢などそうどこにでもいるものではない。季実子に断られたらおそらく適任者は見つからないように思えた。成功するかどうかはやってみなければわからない。ちょっとプレッシャーをかけ過ぎたことに気が付いたお菊さんは、適任者は季実子しかいないことを強調することにした。

笑顔を作ったお菊さんは、季実子の気持ちを楽しめるようになるべくお世辞を交えながら話すことにした。「季実子さん、そう悲観しないでください。あなたにしかできない仕事だと思っています。気品があつて、知性的で、言葉遣いも上品な人は、そうどこにでもいるものではありません。季実子さんのようなお見合い相手を探していたのです。デートはやってみなければわかりません。季実子さん流で構いませんからやっていただきたいのです。デートのセッティングで要望があれば何なりとおっしゃってください」

季実子は依然自信がなかった。引き受けて1ヶ月もしないうちにデートを打ち切られることも考えられた。さらに、セックスに誘惑するという仕事まで要件としてある。季実子は憂鬱になってしまった。しばらく黙りこくっているとお菊が手助けするように話し始めた。「季実子さん、あまり難しく考えなくて結構なんです。デートですから気楽にやってください。ご出身はどちらですか？福岡の方ではないようですが」

季実子は自分の素性について話したくなかった。話していけばAV嬢になったいきさつまで話さなければならなくなってしまうように思えて不安になった。「出身は、京都です」お菊さんは目を丸くして話を続けた。「まあ、私もよ。これも何かの縁じゃないかしら。京女であれば、最高だわ。まったく、幸運だったわ。それじゃ、最初のデートは、京都でなされてはいかがですか？宿泊費と交通費は、こちらが負担しますから、思う存分楽しんでくださって結構ですよ」

不安はまだ幾分あったが、デートの結果は誰にもわからないように思えた。万が一、セックスデートまで行かなかった場合の事を確認することにした。「はい、そこまで私に期待なされるのであれば、全力を尽くしてやってみます。でも、ご希望のセックスデートに到達するかは自信ありません。万が一、セックスまで行かなかった場合はどうなるのですか？」

お菊さんは、必ずセックスデートまで到達してほしかったが、こればかりは神に任せる以外にないと思った。セックスまで到達しなければ、お金をドブに捨てるようなものに思えたが、このことは覚悟の上のバクチと考えて実行する以外にないと思断した。「当然、成功するとは限りません。それでも、私は、季実子さんに賭けてみます。もし、セックスまで行かなくても、報酬は全額支払います」

季実子はそのことを聞いてホッとしたが、ホテルに誘わない生真面目な坊ちゃんをセックスに誘惑する自信は全くなかった。「先ほども申しましたように、ホテルに誘わないような生真面目な方をホテルにこちらから誘う自信はありません。たとえ誘ったとしても、断られると思います。おそらく、セックスはできないと思いますが・・・」お菊さんは、このことは当然予測していた。お菊さんは、セックス誘惑作戦を話すことにした。

「季実子さんの御心配はごもっともです。その対策は今からお話しします。坊ちゃんは、自分からホテルには誘いません。だから、時々、私の家を使ってデートをするようにしてください。自宅であれば、坊ちゃんも気を許すでしょう。油断したところで、自然にセックスアピールをして、坊ちゃんを興奮させてくだされば、きっとセックスしたくなるはずですよ。もたもたしていたら、ペニスを引っ張り出して、しゃぶりまくってください」

季実子の目が輝き始めた。これだったら、うまくできるような気がしてきた。和室であっても隣に腰掛ければスキンシップできるし、坊ちゃんの部屋であればベッドもあるはず。このセッティングであれば成功するような気分になった。生真面目な坊ちゃんと言えども本性はオオカミに違いない。甘い肌を少しでも感じれば、きっと手を出すはず。なんとなく成功するような気がし始めた。この仕事は女優業の修行と思って体当たりでやってみることにした。

「ご自宅を使わせていただければ、成功の確率はグッと上がります。とにかく全力で誘惑してみます。朗報を待っていてください。ところで、今月からデートですか？」お菊さんは、クリスマスイブのチャンスを狙っていた。今週からデートをすれば、クリスマスイブまでに3回はデートできると考えた。クリスマスイブは自宅でパーティーをすれば、セックスのチャンスが必ず生まれると考えた。

ワクワクする気持ちを抑えきれずうわずった声で返事した。「はい、早速、今週、お見合いデートいたします。お見合いと言っても堅苦しいものではなく、気楽にデートしてください。季実子さんは、京都だったわね、それじゃ、嵐山で初デートと言うことで。日程は後日連絡いたします。この仕事を最優先してくださいね。そう、履歴の件があったわ。あなたの素性を打ち合わせていないと話が食い違ってしまうわ。あなたの履歴はどうしますか？」季実子は、確かに京都出身でK大学もちゃんと卒業していたから嘘をつく必要はなかった。

さらに、仕事を請け負う限り家庭の事情も正直に話すことにした。「履歴書ですよ。ちゃんとした履歴書を出さないと失礼ですよ。京都出身、K大学卒業は、事実です。家族構成は、47歳の母とR高校に通っている17歳の弟がいます。父親は7年前に死亡していません。母親は昨年脳梗塞で倒れ、右半身不随の障がい者になりました。現在、特別養護老人ホームに入っていて、弟は寮生活をしています。だから、二人の生活費に毎月最低20万の支払いをしています。このまま母親が老人ホーム生活を続ければ、父が遺してくれた保険金もすぐに底をついてしまいます。それに、弟は来年大学受験です。それで、思い切ってAV嬢になる決意をしました」

季実子のお話を聞いてお金の苦労していることが分かった。AV嬢になったのもお金のためだと理解できた。「それは、御不幸が続きましたね。ところで、季実子さんのお父様は、何をなされていましたか？もしや、府議員では？」季実子は、父親のことは話したくなかったが、同郷でなんとなく気心が知れたので話すことにした。「はい、その通りです」大きくなずいたお菊さんは、季実子の不幸の運命を感じざるを得なかった。「あの収賄事件は、結局、お父様の自殺で迷宮入りになりました。季実子さん家族は災難でしたね」

季実子はうつむいたまま小さくなずいた。「過ぎ去ったことは、もう忘れました。思い出したくもありません。ところで、私の職業ですが、何にしましょうか？下賀茂に実家がありますので京都で働いていることにしますか？」お菊さんも現在の職業を何にするか考えていた。「大卒だし、気品があるから、どんな職業でも問題はないと思うんだけど、そうだと、商工会議所の観光課に勤務、ってのはどうかしら。それがいいわ」季実子も気に入った職業だったので大きくなずいた。

デート修行

中洲のワシントンホテルに一泊し京都の二条ロイヤルホテルに一泊したお菊さんは、12月7日（木）に自宅に戻ると早速、コロнда君にデートの話をすることにした。コロнда君は、お菊さんがもう帰ってきたのかとがっかりしたが、旅の土産話を聞けると思うとワクワクしてきた。お菊さんのコンコンと軽やかなノックが響いた。コロнда君は笑顔で返事した。「はい、どうぞ」お菊さんは、ドアを開くと取ってつけたような笑顔をのぞかせた。内またのすり足でテーブルの横まで来ると生八つ橋とお茶を載せたトレイをテーブルにそっと置いた。

「坊ちゃん、生八つ橋よ。さあ召し上がれ」コロнда君は、生八つ橋と聞いてよだれが出そうになった。「おいそうですね。お菊さんは、分かってらっしゃる。きっと、旅先でなにかいいことでもあたんですね。いつになくご機嫌な表情ですよ」お菊さんは、早速デートの話を切り出した。「坊ちゃんにとって、いい話なんですよ。デートの相手が早速見つかったのよ。今週の土曜日、デートできそうかしら。よかったら、早速先方に連絡するわ」

コロнда君は、お見合いの相手を探しに京都に行ったに違いないと思っていたが、やはりそうだったかとガツクリ来た。「いや、今のところ予定はないけど。デートの修行であって、デートしたからと言って結婚はしませんよ。それでよければ、デートします」お菊さんは、大きくなずき笑顔で返事した。「相手だって結婚するかどうかは、デートをしてから決めるものよ。あくまでも、ありふれたデートでいいの。結婚のことは考えず、男を磨くつもりで気楽にデートしてちょうだい」

コロンダ君は、お菊さんの物分かりの良さに気持ち悪くなった。コロンダ君はもう一度念を押すことにした。「結婚はしませんよ。それでいいのですね。3か月後には、きっぱりと別れていいのですね。約束ですよ」コロンダ君もしつこい男だと思ったが、お菊さんは大きくうなずき返事した。「あくまでもデートだけです。坊ちゃんのやりたいようにデートして、3か月後には、結婚したくなければ、きっぱりと別れて結構です。先方にも、嫌になればいつでもデートを断っていいと伝えてあります。坊ちゃん、頑張らないと、一回のデートで終わりってこともありますよ」

デートだけであることが確認できて、コロンダ君の顔が緩んだ。ホッとしたコロンダ君は、どんな相手か聞きたくなった。「お菊さん、今度はどのような方ですか？京美人ですか？」お菊さんは、彼女の素性について詳しい話をせず、写真も見せず、初対面のデートをさせることにした。「今回は、写真はありません。お相手は、池上季実子さんと言って、とっても美しい京美人です。初デートは、京都嵐山でどうかしら」

コロンダ君は、写真を見ずにお見合いするのは初めてであった。でも、顔も知らずに初めて会うと思うと期待感と不安が入交、ワクワクしてきた。「嵐山ですね。いいじゃないですか。どんな方かな～～。ドキドキするな～～」お菊さんは、うぶな坊ちゃんの興奮を見ていると吹き出しそうになった。「それじゃ、お見合いの日は、12月9日（土）の午前11時。落ち合う場所は、渡月橋北口。よし決まり。先方さんに日時と場所を知らせるわ。坊ちゃんは、季実子さんの顔を知らないから、最初のデートはお菊が引き合わせましょう。ババア～は、すぐに立ち去りますから、後はご自由にデートしてちょうだい」

お菊さんとコロンダ君は、12月9日（土）午前10時前30分に渡月橋の北口に到着した。万が一遅刻して、ルーズな男性と思われたならば、一回のデートで断られるかも、とお菊さんに脅されたコロンダ君は、早めに到着することにした。季実子は11時5分前に着物姿で現れた。お菊さんは、二人を面会させると、季実子にウインクをして即座に立ち去った。すでに10回お見合いしていたコロンダ君は、今回も適当な挨拶をして食事をする計画を立てていた。

今までのお見合い相手は、まあまあ美人で気品があったが、いかにも上流階級のプライドを鼻にかけたような上から目線の女性が多かった。ところが、季実子は美人と言うよりも色っぽく、しかも、気品があるにもかかわらず、庶民的な雰囲気醸し出していた。通りすがりの男性たちは、彼女に目を奪われ、彼女に視線を向けたまま歩いていた。確かに、ミス着物を思わせる和服美人と言えた。今までお見合いした中では、最もコロンダ君好みだった。

「少し歩きましょう。お菊さんから、なにか、僕のことをお聞きになりましたか？」季実子は、参議院議員であること以外何も知らされていなかった。「参議院議員でいらっしゃるんですよ。そのほかは、お聞きしていません。私のことはどうです？」コロンダ君も出身が京都ということ以外何も知らされてなかった。「季実子さんは、京都出身と言うことは聞きましたが、それだけです」

季実子は、小さな声でクスクスと笑ってしまった。「コロンダ君は何か変な表情でもしたのかと顔を真っ赤にしてしまった。本当に世間知らずの坊ちゃんだということが、態度と話し方ではっきりとわかり、つい笑ってしまったのだった。「私は、京都商工会議所の観光課で働いています。趣味と言えるものはないのですが、三味線とお茶をやっています。大学時代は、温泉巡りサークルに所属していました。「秀文さんの御趣味は？」

コロンダ君は、趣味と言うものがないため気まづくなってしまう、頭を掻きむしってしまった。「それが、趣味と言うものがないんですよ。どちらかと言うと、スポーツ音痴の文学少年なんです。趣味と言えるかどうか、小説を書くのが好きなんです。お菊さんに比べたら、子供の作文みたいなもので、人に言えるほどの趣味じゃないんです。でも、季実子さんには、なぜか、話してしまいました。どうしてなんだろう」

季実子は、また、クスクス笑ってしまった。こんなに笑われたのは初めてで、やっぱ、自分はモテない男だと実感し情けなくなってしまった。「僕って、詰まんないでしょ。僕は、男としての魅力がないんですよ。結局、片思いで、失恋してしまうんです」目を丸くした季実子は、コロンダ君の顔を見つめると少し大きな声でクスクスと笑ってしまった。さすがにコロンダ君も、侮辱されているみたいで食って掛かった。「そんなにおかしいですかね。初めてでしょ、こんな、詰まんない男」

季実子は、笑いすぎたことに申し訳なく思った。決して馬鹿にしたのではなく、あまりにもうぶなのでつい笑ってしまったのだった。でも、やはり笑いをこらえるべきだったと深く反省したが、後の祭りだった。「ごめんなさい。決して、詰まんない男性なんて、思っていません。とっつても、素直な方で、愉快的な方だと思います。私なんて、大学では、温泉巡りばかりやって、勉強なんて全くしませんでした。それに、私も、彼氏ができなかったんです」

渡月橋の中間あたりまで来ると歩きながらの会話にうんざりし始めていた。二人の横を通りすぎる男性たちは、季実子を女優と思っているのかジロジロと見つめ通り過ぎていた。おそらく、自分は付き人にでも見られているんじゃないかと思えた。お腹もすいてきたことだし、お菊さんが予約しておいた“よしむら”に誘うことにした。「少し早いです、食事にいたしませんか。手打ちそば“よしむら”はいかがですか？」

季実子も歩くのは苦手、腰かけて話をしたかった。「はい。よしむらは超人気店ですね。でも、もうこの時間だと、満席で、1時間ぐらい待たされますね」ニコツと笑顔を作ったコロンダ君は返事した。「ご心配なく。2階の窓際の席を予約していますから」季実子はさすが、国会議員の力だと思った。お店は、国会議員と聞いて最高の窓際の席を確保したに違いないと思った。

京都出身の季実子は、子供のころから“よしむら”で何度も食事したことがあった。「さすが、議員さんですね。最高の窓際の席を確保できるなんて。二階の窓から一望できる渡月橋と桂川は絶景ですよ。絶景を眺めながら食事ができるなんて、今日は、幸運の日です。うれしいわ」季実子に喜んでもらったことは、素直にうれしかった。でも、議員の力でいい席を確保したことは事実であったが、面と向かって言われると政治家は権力者と思われているようで気まずくなってしまった。

コロンダ君は、一刻も早く腰かけて絶景を眺めながら会話したかった。「さあ、参りましょう。おなかペコペコです」子供のような表情に季実子も笑顔を作った。受付が予約を確認し、二人は二階の席に案内された。早速お品書きを手にしたコロンダ君は、渡月膳を注文することにした。「僕は、渡月膳にしますが、季実子さんは？」季実子は何か悩んでいるようだった。「そうですね、私は、野菜そばにします」

季実子はぼんやりと眼下の渡月橋を眺めていた。コロンダ君は、話題に悩んだが、とにかく季実子を褒めることにした。「和服がお似合いですね。ミス着物になられたことがおありじゃないですか？」ニコツと笑顔を作った季実子は返事した。「はい、20歳の時、京都ミス着物になりました」コロンダ君は、大きくうなずき話を続けた。「僕は、特にこれと言った取柄がないし、趣味も特にこれと言ったものがないんです。面白くない男なんです」

笑われたことをかなり気にしているようで気の毒になった。「私こそ、中途半端な性格なんです。自分のイヤなところなんです。お茶も三味線も中途半端で一向に上達しないんです。どちらかと言うと怠け者で、遊び好きなんです。学生時代は、バイトでお金をためては、温泉やお寺巡りをしていました。池上家は臨済宗なのですが、建仁寺、東福寺、円覚寺、南禅寺、大徳寺、はもちろん、そのほか数えきれないくらいのお寺を学生時代に参拝しました。今流行りの、寺女なんです。意外と地味なんですよ」

臨済宗と聞いて、共通点を見つけたコロンド君は、笑顔で話を続けた。「僕も臨済宗なんです。一休さんで知られてますよね。奇遇だな～。同じ宗派なんですね。温泉巡りは、やったことはありませんが、温泉は好きですよ。いつか二人で温泉巡りしましょうか。いや、ちょっと、図々しかったですね。初対面なのに」大胆なことと言ってしまったコロンド君は、顔を赤らめワハハと照れ隠し笑いをして頭を掻きむしった。

うぶで遠慮がちな態度に距離を感じていたが、大胆な言葉のおかげで二人が急に接近したように感じた。あくまでもお芝居のデートであったが、いつの間にかマジにコロンド君のことが気になっていた。「本当に、ご一緒して下さるんですか。うれしいわ。ぜひ、温泉巡りに参りましょう。でも、議員さんは、とてもお忙しいんじゃないですか？」コロンド君は、誘いに乗ってくれたことに有頂天になってしまった。「いや、季実子さんと旅行できるのならば、大優先に休暇を取ります。うれしいな～。もう、ワクワクしてきました」

無邪気なコロンド君にグッと声を抑えて心で笑ってしまった。「ところで、ネコはお好きですか？私は、ネコが大好きで、子供のころから猫を飼っているんです。今は、タマと言う三毛を飼っています。猫と暮らしていると心が安らぐんです。何か、ペットを飼われていますか？」コロンド君は、またもや共通点を見つけ笑顔を作った。「僕もネコが好きなんです。ボスと言うシャム猫を飼っています。二人って、似た者同士なんですかね」ボスはお菊さんが世話をしている愛猫だったが、勢いで自分が飼っているように話してしまった。ニコッと笑顔を作ったコロンド君は、季実子を見つめた。

コロンド君は、初対面の相手にこれほど気軽に話をしたのは初めてであった。不思議なくらい季実子を親しく感じ、これからも何度でも会って話をしたい気持ちになった。季実子も国会議員の坊ちゃんと聞いていたから、まったく話がかみ合わないと思っていたが、思っていたより庶民的な感性の持ち主で話が弾み、初デートの仕事は成功したと実感した。次回のデートはコロンド君から連絡するというので、嵐山公園を散策した後、二人は別れた。

上機嫌で帰宅したコロンダ君は、玄関のチャイムを鳴らし、即座に踊り場に駆け上がるとお菊さんの部屋にかけて行った。お菊さんは、ちゃぶ台のノートパソコンのキーボードを真剣に見つめ指を動かしていた。お菊さんの正面に正座すると興奮した声で話しかけた。「ただ今、お菊さん。やりましたよ。僕としては、結構うまくやったと思いますよ。お菊さん、聞いてくださいよ。仕事はその辺にして」

お菊さんは、きっとはしゃいで帰ってくると予測していた。さすがプロは違うと季実子の腕に感心していた。お菊さんは、手のひらで遊ばれている坊ちゃんをからかってやることにした。ノートパソコンに据えていた目を持ち上げ感激したような表情でコロンダ君に声をかけた。「坊ちゃん、うまくいったみたいじゃない。さすが、坊ちゃん。もしかしたら、坊ちゃんは、モテる方なのかも？次のデートの約束はできたの？」

有頂天になったコロンダ君であったが、お菊さんにイヤミを言った。「確かに、うまくいったように思うけど、ちょっと、つり合いが取れないんじゃないかな～。季実子さんは、ミス着物にミスキャンパスと言うじゃないか。美人過ぎて、デートしていても気まずくなってしまったよ。二人で渡月橋を歩いていると、通りすがりの野郎たちは、季実子さんをジロジロ見つめてさ」

吹き出しそうになったお菊さんは、笑いをこらえて返事した。「お菊が言うのもなんですが、坊ちゃんも、結構イケてると思いますよ。坊ちゃんに足りないのは、野性味だけです。女は、たくましい男に引かれるものなんです。グイグイ女を引っ張っていく男になってください。きっと、坊ちゃんなら、いっばしの男になれる。自信をもって、季実子さんにアタックしてくださいな」

季実子を気に入ったコロンダ君は、次回のデートが楽しみになっていた。いずれ振られると思ったが、それでも季実子とのデートを繰り返したいという気持ちは強まり、本当に実現するか不安であったが、次回は温泉に誘う気持ちになっていた。「お菊さん、季実子さんは、温泉巡りが趣味なんだそうです。次は、道後温泉に誘うつもりです。成功するように、お菊さん、祈ってください」お菊さんは、手を合わせて神にお願いした。“どうか、季実子の肌におぼれて笹子のことを忘れませうように”